

第29号 20円

開館七周年記念号
昭和48年1月25日

内容

大学教育の中の セミナー・ハウス	1
創立十周年・ 開館七周年記念行事	2
祝辞	5
夢を有形に・記念グラフ	6
記念講演「余暇の戒め」	8
開館七周年記念セミナー	9
第50回大学共同セミナー	10
千人会	11
利用状況	12

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

《所在地》

東京都八王子市下柚木
電話 0426-76-8511~2

《東京事務所》

東京都中央区日本橋本町 3の3
三井銀行本町支店ビル5階
電話 東京(241)3961
振替口座 東京74590番

編集・発行人 飯田宗一郎
製作 中央公論事業出版

第二期への展望

東京大学総長

加藤 一郎

私は東京大学を代表して祝辞を述べることになっていいるのだと思いますが、このセミナー・ハウスには前からお世話になっていいますので、部外者として祝辞を述べるとい感じがございません。

東京大学は会員校であり、そういう代表として私は理事になっておりますが、その前からいろいろと関係がございます。一番はじめに私がここに来たのは開館式をする前だと思いますが、この丘に最初の建物ができ、道も泥んこの時だったと思います。その時は「公害法の研究」という、その頃はやりかけていたテーマを扱って若い人たちといっしょに合宿をさせていただきました。まだ風呂場もできてあまりきれいでなかったように記憶しています。その後、飯田さんから「企画委員になってほしい」というお話がありました。共同セミナーの企画、相談にあずかったこともあり、産業人セミナー」というのをしたこともあります。そういうことで、ここには泊ったり、野猿峰をずっと歩いたりした懐かしい思い出があります。

それが、もう創立十周年、開館七周年ということで、私には余計なできごとがはさまりました。

で、ついこの前のように思っているのですけれども、もうそんな経ったのかという感じがします。その間の関係者のご苦労は大変なもので、私も端から拝見しております。そういう方々の努力なくしてこういう事業はうまくいかないのだらうと思っております。

先ほど、大学改革について批判的なお話がありましたけれど、今までの大学を変えていくというのは大変むずかしいことです。新しいものを作るといことはマイナスマ面がありませんが、変えるとい



うことにはプラス面があるかわりにマイナス面があつて、例えば改革に十年の歳月を必要とすると、その間、教育・研究の時間を裂かれる、あるいはいろいろなトラブルが起こるといことを比較考量しないと、既存の大学の改革は進められません。そういう意味では、こういう新しいものである大学セミナー・ハウスをつくるについては、それなりにむずかしい点はありません。非常に楽しい仕事であったのではないかと思っております。ちょうど今ま

で、大学セミナー・ハウスのワン・ゼネレーションが終り、これからセカンド・ゼネレーションになるわけです。

こういう仕事には、会員校の組織とか理事会とかいったものが必ず必要だと思いますが、それにもまして、こういうことを支持してくださる個人の情熱が一層必要だろーうと思います。今までは比較的年配の方々のご助力によってきたと思いますが、これからは若い方々、あるいはセミナーに参加された学生諸君がこの支持者になって、こ

の事業を發展させていたきたいと念願する次第です。

人を育てる丘

早稲田大学商学部長

染谷恭次郎

私は、このセミナー・ハウスを利用していただいている多くの大学の多くのゼミの人たちに代つて、お礼とお祝いを申しあげたいと思ひます。

たくさんの方が集まり、散じていく今日の大学の中で、学生諸君

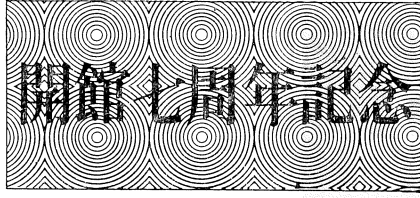
は何を得ていくのだろうか、私はしばしば問いかけます。学問、知識、あるいは物事を正しく判断できる良識などいろいろあるかと思ひますが、何を以て一番大切なものは人ではないでしょうか。長い人生を歩んでいく場合、喜びや悲しみを分かち合う友人、またそうした人たちの成長を心から喜んでくれる教師、こういった人たちの和というものが一番大切ではないだろうかといふ言ひです。

今日の大学は、あわただしく殺伐としていいますが、そういう中で人々が心を通わし、心を触れ合うという場が非常に少ない、そういう点でこのセミナー・ハウスは非常に貴重だと思ひます。

私はよく大勢の学生を連れてここにきて、二泊三日の間、朝から晩まで語り合い、勉強し合うわけです。そういうことで、このセミナー・ハウスというのは私にとって非常にありがたい存在です。私たちがここが好きです。そしてここで学んだ多くの学生も尊い思い出として人生を歩んでいくのだと思ひます。静かな環境、清潔な宿舎、そしておいしいご馳走、それ以上にセミナー・ハウスの方々の暖いお心持、これが私たちにとてもは非常にうれしいのです。

そうした意味において、皆様方のご努力に対して、厚くお礼申し上げます。

(創立十周年、開館七周年記念式の祝辞の概要)



昭和47年11月18日

晩秋の多摩の丘、敷地内の雑木の紅葉も、落葉寸前である。幸いにも好天に恵まれ、講堂周辺の美しい自然の風景を眺望しながら、記念行事を展開することができた。約三五〇名の方々がお客様というよりも身内の者としてお祝いの心をこの丘までご持参くださった。

昭和四〇年七月に開館式を行ったのが昭和三十七年三月であるから、本年はまた創立十周年に当たっている。大学セミナー・ハウスは国公立大学が共同して大学教育を行なうという画期的な試みを重ねながら、創業者七年の歴史をつくりあげてきた。当時は僅かに農家の屋根が見えるだけの静かな多摩丘陵だった。七、七年の歴史は、多摩の自然の

◆記念式典◆

◆記念式◆

ピアノの演奏が終わったところで、司式者国際基督教大学の星野命教授は、各大学に開放されたセミナー・ハウスの性格にふさわしい多数の参列者を得て挙式できる幸せを語りながら開会を宣言する。

まず、開会挨拶の加藤六美理事長は、創設から今日に至るまでの経過を報告し、その間の事業、施設の充実が、特に創立関係者の労苦に負うことを感謝するとともに経営の安定のうえに今後の発展を期したいと、関係各面の協力を懇請して式辞とする。

ついで来賓祝辞に移り、村山松雄文部次官、越智勇一日本学術会議会長、江幡清朝日新聞論説主幹が、この構想が実り成果を挙げつつあることに祝意を表し、官界、学界、言論界とそれぞれの立場からハウスの存在を高く評価され、今後さらにその意義は大きくなるであろうと激励の言葉を述べられた。

佐藤公孝氏の指揮による国立音楽大学イリス合唱団、三〇名からなる男女混声の頌歌、「大学セミナー・ハウス讃歌」が快く歌われ出席者の注目をあびる。

ここで、三笠宮殿下のおこぼをいただく。この丘に記念式の来

賓として二回、ご自分のオリエント学会の研究発表会には会長としておいでになられたことのある殿下の、形式ばらないユーモラスなおこぼには、当ハウスに寄せられる暖いお気持ちがうかがえ、会場はますます親近の雰囲気がかもし出された。

加藤一郎東大総長、染谷恭次郎早大教授も、会員校やゼミ利用者を代表して、内輪の者として喜びをわかち合いたいと祝辞を述べ、学生の立場からは、東京女子大学の池田道子さんが、この丘は学問と人間に出会う場であり、友人と自然との語り合いのなかに自分自身を見出す所である、と感想を語り、共感の拍手がわく。これに和するかのうように、イリス合唱団の佐藤氏のタクトによって、ベートーヴェンの「自然における神の栄光」がおごそかに歌われる。続いて、三つの記念すべき贈呈が行なわれた。一つは、当ハウス創設当初は後援会長として建設資金の募集に尽力され、その後の募金にも大きな力をいたされた佐藤喜一郎氏の長年のご奉仕に感謝するた

め、佐藤崎、ようこそ広場の命名と開園のテープを切るハサミが加藤理事長から手渡され、これを受けて同氏は、創立以来の因縁を感じ深く語り、祝辞をかねた感謝を述べられた。二番目は、『日本人の

◆プログラム◆

◆記念式 一時 講堂

司式 国際基督教大学教授 星野 命

奏楽 国立音楽大学生 赤井千恵子

挨拶と式辞

理事長 加藤 六美

祝辞

文部次官 村山 松雄

日本学術会議会長 越智 勇一

朝日新聞論説主幹 江幡 清

大学セミナー・ハウス讃歌

国立音大イリス合唱団

指揮 佐藤 公孝

おこぼは 三笠宮崇仁殿下

祝辞

東京大学総長 加藤 一郎

早稲田大学商学部長 染谷恭次郎

東京女子大学生 池田 道子

合唱 国立音大イリス合唱団

ベートーヴェン「自然における神の栄光」

指揮 佐藤 公孝

贈呈

佐藤崎・ようこそ広場

理事長 加藤 六美

開館七周年記念論集

編集委員長

小堀桂一郎

詩（開館七周年に寄せて）

詩人 藤富 保男

挨拶と謝辞

専務理事 飯田宗一郎

レセプション

一二三〇分 食堂

司会 星野 命

開会挨拶（乾杯）

武蔵大学学長 正田建次郎

卓話

三井銀行相談役 佐藤喜一郎

慶応義塾大学塾長 佐藤 朔

毎日新聞論説顧問 藤田 信勝

慶応義塾大学卒業生 藤本 紘

◆記念講演 一四時 講堂

司会 上智大学教授 川田 侃

「余暇の戒め」 東京大学名誉教授 大河内一男

「古代オリエント文明における普遍性と個別性」

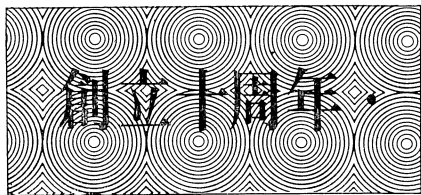
三笠宮崇仁殿下

サンセット・パーティ 一六時

ガーデン・パーティ 一六時

そ広場

サバー・パーティ 日本館食堂



三笠宮殿下をお迎えして ここ多摩の丘で永遠を語る

中にセミナーの丘をつくった。宅地開発のため不幸にして周辺の丘は変貌してしまっただが、ここセミナーの丘は、七年間に利用されたゼミやグループが植えられた多くの記念樹がみごとに成長して美しいキャンパスとなった。三回に亘る募金運動も財界の協力によって成功し、講堂、図書館、教師館、長期研修セミナー館が次々に建ち、また約五〇〇坪の敷地が増加した。テニスコートも新設した。セミナーの丘は同時に出会いの丘でもあった。本年一〇月末の統計によれば、開館以来セミナーなどの研修グループ四、九〇六回、宿泊した利用者延べ二、三三、三〇〇人ということになる。

一月一八日の記念行事は以上のような具体的事実の上に行なわれた慶祝の祭典であった。

再発見」が開館七周年記念論集として贈呈された。この論集は、この日のために出版の完成をみたもので、編集委員長の責を果たされた東京大学助教授小堀桂一郎氏が学問の場に最適な記念品であろうとこの論集を贈呈するに至った経緯を述べて祝意を表された。三番目は、詩人の藤富保男氏が自作の詩を自身で朗読されながらの献詩である。「火を握る人」と題するこの詩は、別掲の通り、飯田宗一郎専務理事に献呈されたものである。お礼に歩み寄った飯田専務理事の手に詩がしっかりと納められ、場内は、格調高い詩句にじむ苦節の歳月をおもいやり、声援の拍手がひとときわ高い。そのまま謝辞と閉会挨拶に立った飯田専務理事は、しばし感激を抑えかねる

三笠宮殿下の記念植樹

記念式の後、式場から野外に移り、講堂からようこそ広場に至るプロムナードの右側に記念の松が植えられた。殿下が鋤で土をかける光景は、会衆と自然とよく調和し、自ら人々の顔をほころばせたようだ。

それにつづいて村山文部次官もこの記念すべき日に植樹をしたいというご希望から松を寄贈され、その披露の鋤入れが行なわれた。ある人が「松雄が松を植えたね」といったのも、ほほえましい笑談であった。

佐藤峠・ようこそ広場の開園



主な出席者(敬称略・順不同)

- | | | | |
|-----------|--------|--------------|-------|
| 茅誠司氏夫人 | 茅 伊登子 | 東京工業大学教授 | 安倍 勇 |
| 一橋大学名誉教授 | 高橋 泰蔵 | 武蔵大学教授 | 今井 淳 |
| 一橋大学名誉教授 | 増田 四郎 | 明治学院大学教授 | 岡島 真理 |
| 千葉大学名誉教授 | 川喜田愛郎 | 明治学院大学教授 | 岡安 信男 |
| 千葉工業大学教授 | 実吉 純一 | 上智大学教授 | 押田 勇雄 |
| 東北電力名誉相談役 | 内ヶ崎賢五郎 | 上智大学学生部長 | 緒方 直哉 |
| 慶応義塾大学塾長 | 佐藤 朔 | お茶の水女子大学助教授 | 柏原 啓一 |
| ICU学長 | 篠遠 喜人 | 日本女子大学教授 | 高橋 憲子 |
| 東京教育大学学長 | 宮島 龍興 | 独協大学助教授 | 高橋 正男 |
| 上智大学学長 | 守屋美賀雄 | 帝京大学教授 | 武村 次郎 |
| 明治大学名誉教授 | 小出 廉二 | 東山荘所長 | 高倉 正治 |
| ICU学務副学長 | 三宅 暁 | 工学院大学助教授 | 今井 義夫 |
| 東京大学教授 | 菅野 晴 | 目白学園短期大教授 | 片山 精一 |
| 東京大学教授 | 秀村 欣二 | 多摩電気工業顧問 | 釜淵 善一 |
| 東京大学教授 | 湊 秀雄 | 桜美林大学理事 | 清水 畏三 |
| 一橋大学教授 | 深沢 宏 | 仲野電機社長 | 千野 熊男 |
| 建設省建築研究所 | 早川 和男 | 早稲田奉仕園総主事 | 布施 瀧雄 |
| 東京家庭裁判所判事 | 森田 宗一 | 東京女子大図書館長 | 樋口美智恵 |
| 明治学院大学教授 | 神保 信一 | 都立立川短大助教授 | 吉田 幸弘 |
| 古河電機社長 | 吉田 公保 | 日軽アルミ | 森川 芳彦 |
| 中央大学教授 | 高柳 暁 | 清水建設現場課長 | 平松 幸一 |
| 立教大学名誉教授 | 中川 重男 | 成城大学助教授 | 野口 武徳 |
| 東京女子大学教授 | 根岸 愛子 | 私立大学連盟事務局長補佐 | 石田 昭男 |
| 明治大学教授 | 田中 庄蔵 | 八王子市市議会議員 | 石井 栄治 |
| 東京大学学生部長 | 長谷川修一 | ラボ教育センター | 村田 達子 |
| 成蹊大学教授 | 松尾 登 | | |
| 横浜国立大学教授 | 赤松 秀雄 | | |

レセプション

プログラム第二部の食堂におけるレセプションも、星野教授が再び司会の役を果たされ始められた。

この頃から家族連れの参会者もふえ、記念庭園の周囲に急拠、野外



ようこそ広場での最初の記念撮影

の第二会場を増設し、学生諸君の大部分にはそこで昼食をとってもらうほどの盛況であった。

は、野外の第二会場との往来も活発になる。間合を待っていた女子学生達から、上代たの先生をして当ハウスの育成の陰の力、茅伊登子、飯田八千代両夫人に花束を贈呈し、その労を謝する、ほほえましいひとこまもあった。

こうして午後五時、記念行事の一応のプログラムを終え、随時参会というかたちで、ようこそ広場

しるこ、おそばの模疑店も大繁昌である。宴の半ば三井銀行相談役・佐藤喜一郎氏、慶応義塾大学塾長・佐藤朔氏、毎日新聞の余録子・藤田信勝氏、卒業生の慶応OB藤本敏君などがそれぞれの経験談を語り、この丘の効用を奨揚され、今後の発展を祈ってくださる。また、森戸辰男、赤堀四郎などの先生方、アジア財団日本代表ジエームズ・スチュアート氏の祝電が披露される頃に

◆ 記念講演 ◆

- 司会 上智大学教授 川田 侃氏
- 「余暇の戒め」 東京大学名誉教授 大河内一男氏
- 「古代オリエント文明における普遍性と個性」 三笠宮崇仁殿下

大河内一男先生は開設当初の大総長であり理事であられたご縁の深い方で、今日の記念講演の最責任者である。レジャー時代に対する先生独自の所感は別記のように含蓄の深いお話しであった。

三笠宮殿下も、今度は学者として登壇され、スライドを使用されながら、古代オリエント文明の秘密をご専門の立場から解き明かされ、ときおり、爆笑を誘う闊達な名調子で聴衆を魅了される。

多くの人々にとっては、このようなお二人のお話しをきくことは珍しい機会であったためか、時の過ぎるのも忘れていたようでもあった。

* * *
こうして午後五時、記念行事の一応のプログラムを終え、随時参会というかたちで、ようこそ広場

が、ピアノ演奏者の赤井千恵子さんの協力など、プログラムのなかで、音楽は一段と欲びの日の実感を高調させるかのようであった。

周辺における薄暮の野外パーティーに移ったが、赤い提灯に映える甘酒、やきいも、たい焼き等々の屋台店はまことに好評、童心にかえった参会者の健啖ぶりも見事であ

感想

開館七周年・創立十周年
記念式に出席して

成蹊大学教授 宇野 重昭

記念式に出席してまず感じたことは、よくここまで順調に発展してきたものだということ。やはり夢が現実化したという思いです。私は新制大学の第一期生ですが、当時の一、二年の教養課程はまるで講習会の寄りあつまりといった感じでした。一般教養の夢を責任をもって実現しようとする人がいなくなっただけです。それだけに、私は、この大学セミナー・ハウスで、夢が実現されつつあることをうれしく思います。

った。さらに、行事の後半からかけつけてくださった方々や、共同セミナーの学生たち、一般のセミナーを利用者のため食堂でサバーパーティーを催したが、二〇〇名ほどの会場となり、またひとしきり盛大な交歓の集いが続き、いつ果てるでもない祝典の全日程は、午後七時、無事終わった。この一日、こんなにも多くの方がこの丘に集ってお祝いくださったのも七年の歴史があったからであろう。

ただ、これからも大学セミナー・ハウスの規模や組織は大きくなりつつけるでしょう。その場合、組織や運営方法の「近代化」は不可避でしょう。しかし現在の多くの大学に見られるように、あまりに巨大過ぎて動きがつかないといったような状況に陥ることのないよう願っています。悪しき意味で「成功」し過ぎないことこそ、初志貫徹の道ではなからうかと思うわけ

祝辞

七年を二期として次の七年を問う

文部次官

村山 松雄

私は大学関係の仕事をしておりますので開館の際にもお招きを受けましたが、思い起こしますと、雨の中で、まだあちこち施設も整わないのに、大きな希望と意気込みで発足を祝ったことを昨日のように思い出します。しかし、施設も整備され利用者が増えた反面、周囲の環境が社会的な進展により昔日のようでないということは、やや残念な気もいたします。けれどもその中にありまして、当セミナー・ハウスが七年間に立派な歩みを遂げてこられましたし、これからの発展も確実に期待できることを確信するものです。

この施設の意義は、現在の大学制度ができ、その趣旨の実現にいろいろ努力してまいりましたが、新しい大学のかなめであると考えられた「学問と人物との調和」という人間形成「カリキュラムで言えば専門教育と一般教育の調和」という大学の盲点を埋める一大試みにあったと言えると思います。

最近では、同じような試みが関西の方にも実現の気運に向っておりますし、個別の大学あるいは若干の大学が共同で試みている事例

も増えております。

大学の問題はいろいろ言われておりますが、要は大学人が実践的に問題を解明し、その解決をはかるということが基本にすえられない限りは、問題の解決はないと思います。そういう意味において、この施設のもつ意義は、従来大きなものでございましたし、これからはますます大きなものになると確信して疑われないわけでありませう。

七年間に大きな成果を挙げたわけですが、今後とも、わが国の大学教育というものが限り、新しい課題を求め、新しい人が問題意識をもって集い、発展をし、成果を収めていくものと信じます。

日本学術会議会長

越智 勇一

私がまだ東大におりました時分にこの財団をつくりたいという趣意書を見せていただきましたが、当時の私は、大学ではいろいろな施設がたいして不自由しているわけではないからと、こういう施設の必要性に気づきませんでした。

ところがここが開館してまもなく、昭和四二、三年頃から大学紛争が熾烈になり、多くの大学において正規の教育活動、あるいは研究活動が行われなくなった頃に、

私は、あちこちからセミナー・ハウスではそういうことを補って立派な研究活動・討議がされているというのを聞きまして、以前の不明を恥じて非常に大きな関心を持つようになったのです。

ところで、最近、別の意味でここに大きな関心を持つようになりました。それは、今申しました大学紛争が激しかった頃にはほとんど全国の大学で大学改革の問題について非常に熱心に討議されたにもかかわらず、表向きの紛争が収まった今日の状態において大学の改革がされたかと申しますと、私の知るかぎり、改革はほとんどされていないというのが現状であろうかと思えます。ご承知のとおり、大学の先生は教育と研究を行なうわけですが、研究者としての先生は現状に甘んじないでこれを改革して先に進もうという意欲に満ちているでしょうし、教育者としての先生は、なるべく秩序を現状のままにして難のないようにしたいというような矛盾があるのではないかと私は思います。大学紛争の盛んな時分にはこの研究者としてのお考えが強く、穏やかになってくると今度は先生としての意志のほうが強くなって改革に向かわなくなったのではないかと考えます。

しかし、当時の改革的な考え方の根というのはまだ大学の中に残っておりますが、閉ざされた大学の中ではなかなか前進しないというのが今日の現状かと思えます。

それについて、この春、文部省が単位の互換を認めまして、こういう点を通じて日本の大学は開かれていくと思えますし、そういう状況にこのセミナー・ハウスの理想が合致すると大学の改革、ひいては将来の日本の発展ができていくのではないかと思います。

朝日新聞論説主幹

江幡 清

私どもの先輩であります故笠信太郎が、このセミナー・ハウスを創設期から非常な関心を持って見守っておりますことと、私が責任をもって預っております朝日新聞の社説で数回とりあげたこと、同僚・先輩の何人かが大学共同セミナーに講師として参加したこと、また私自身産業人セミナーで時折こゝを利用していただきまして、そういう意味でひと言お祝いを述べさせていただきます。

正直に申しますと、新聞というものには常識的に考えて、当然、あるいは非常に良いことだから今後大いに伸ばしていかなければならないという事柄にはあまり筆を執りません。そういう中で私どもがセミナー・ハウスに非常な関心を持ちますのは、これまでの大学が大量生産教育であり、閉鎖的であったものを、セミナー・ハウスが打ち破り、人間と人間の触れ合いによる教育、インター・カレッジ的教育を打ち立てるアンチ・テーゼにできるのではないかと意

慶応義塾大学 O・B

藤本 紘

開館式に出席したのは確か大学三年のときで、その後二年、まったくセミナー・ハウス中心に生活が動いていたように思う。特に四年の春、一周年記念セミナー「大学の理念と現実」を学生が中心になってプランを練った時に、週に一回はセミナー・ハウスで結ばれた仲間と会っていたように思う。

開館七周年、年ごとに増加する利用者が、大学の本当の精神をこの場所で行うことは、大学教育の欠陥を補う意味で貴重である。

私は、セミナー・ハウスが今後ますます大学人と社会人が協同して進めるべき大学改革の試金石として機能することを望みます。

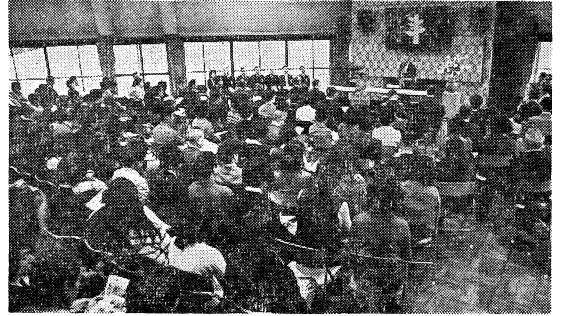
歓迎の祝賀門



夢を有形に 思い出も多し記念樹の丘

— 記念グラフ・人と行事 —

式辞を述べる加藤理事長

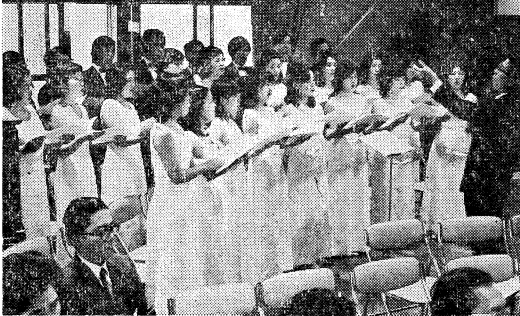


言論界の支持をのべる朝日新聞社・江幡清氏(左)と学生代表として祝辞をのべる東京女子大・池田道子さん(下)

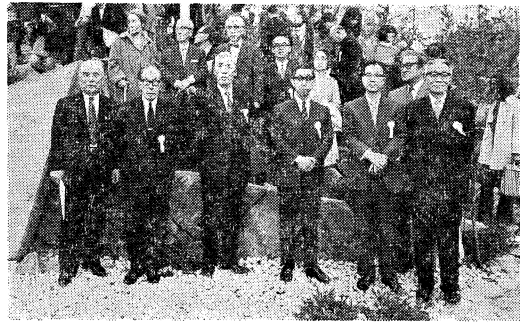


言論界の支持をのべる朝日新聞社・江幡清氏(左)と学生代表として祝辞をのべる東京女子大・池田道子さん(下)

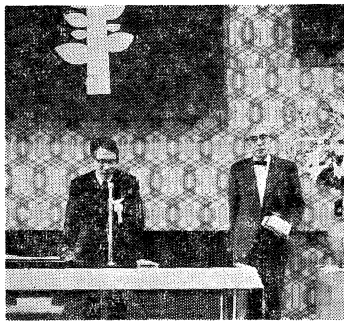
ふんい気を盛りあげる国立音楽大学イリス合唱団



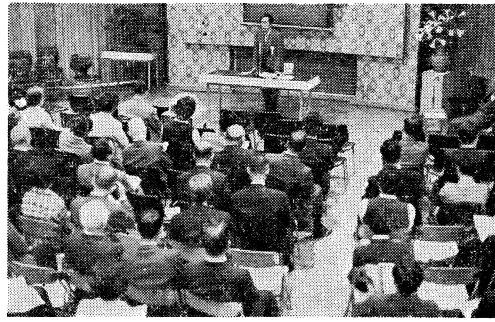
三笠宮殿下をかこんで記念撮影 — この上もない来賓



『日本人の再発見』を贈呈する小堀編集委員長と、これを受ける加藤理事長



記念講演——大河内東大名督教授



献詩を朗読する詩人の藤富保男氏



献詩

火を握る人

— 飯田宗一郎氏に —

藤富 保男

乾いた足をひきずって
この里までさまよった人よ
七年に
七枚の葉が呼吸している
ここに永劫の理念の城を
たてようとした人よ
いま
丘はカララの石のように
光っている
何百何千の小鳥たちが
ここに巣ごもったのだ
メラノからペラロまでの道を
砂をかみ
嵐にさびた眼をして
歩いてきた この苦節
あなたの道はまだ遠い
あなたは意志で石を積み
夢を有形にさせる人だ
あなたは

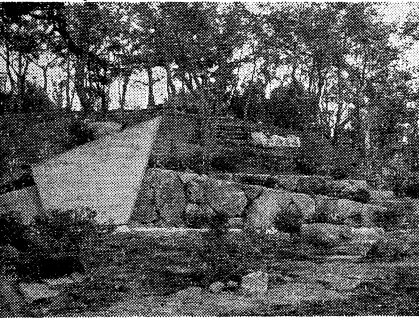
佐藤峠・ようこそ広場の開園テープを切る佐藤喜一郎氏



記念植樹をされる三笠宮殿下



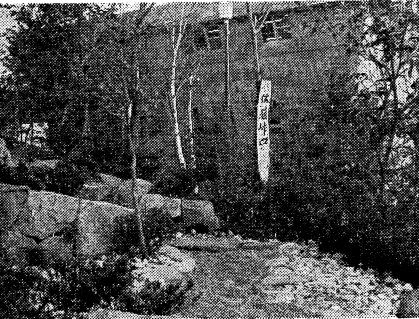
ようこそ広場全景——これから記念写真はどこで撮影するでしょう



正田武蔵大学長のオープニングの乾杯(右) お客さんも学生にまじってなごやかな祝賀パーティ(下)



佐藤峠口から本館を望む



加藤東大総長, 佐藤慶大塾長, 増田前理事長の姿もみえるパーティ風景(右)



十年前の地鎮祭にもおられた陰の功勞者上代先生と妻、飯田両夫人



司会として活躍のICU・星野命先生

祝電

MR SOICHIRO IIDA EXECUTIVE TRUSTEE SEMINAR HOUSE

HEARTY CONGRATULATIONS ON THE TENTH ANNIVERSARY OF YOUR FOUNDING AND SEVEN YEARS OF INSPIRED, INTELLIGENT, SIMPLE YET STYLISH SERVICE TO STUDENTS AND TEACHERS, INTERDISCIPLINARY INTERUNIVERSITY AND INTERNATIONAL. EVERY GOOD PROGRAM HAS A GOOD EXECUTIVE DIRECTOR. MR SOICHIRO IIDA, PLEASE TAKE A BOW. EVERY GOOD PROGRAM HAS OUTSTANDING SUPPORTERS AND I EXTEND MY BEST WISHES TO YOU ALL TODAY. FINALLY EVERY GOOD PROGRAM REPRESENTS A DREAM. I HOPE THAT THE DREAMS OF INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE FOR A BRIGHT AND USEFUL FUTURE WILL COME TRUE.

JAMES L STEWART
LIAISON REPRESENTATIVE
THE ASIA FOUNDATION



にぎわう模擬店夕景(本館前広場)

余暇の戒め

▼記念講演▲ 東京大学名誉教授 大河内一男

日本人はもとも刻苦精励な民族であるとか、寸暇を惜しんで働くなど、いろいろな言葉で言われますが、少なくとも戦前は働き者だということが文字通りあてはまるような生活を庶民は送ってきまされた。この点は外国人とかなり違う点だと私は考えます。少なくとも戦前の労働者は低賃金であり、農民で言えば僅かばかりの土地しかもっておらず、結局、暗くなるまで仕事をしなければ家族を養っていけないという事実がありました。そしてわが国の経済上の理由が、長年の間に人間は働くべきものだという道義論をつくりあげ、それが学校教育や家庭教育などを通して教えられてきました。

したがって、戦前においては余暇というものは決して日本人の間で歓迎はされませんでしたし、また官庁や産業界等でも余暇の問題については消極的、批判的な考え方が強く、余暇・レジャーという言葉は全く見当りませんでした。ところが戦後に、国内では労働基準法ができて、「人たるに値する生活」を国家は保障しなければならぬという観点から、賃金・労働時間・休日数などについて法の建前として言及しているし、労働組合等が活躍するようになってき

ました。さらにジュネーブのILO等が時間の短縮・余暇の増大について日本に勧告をするなど、国内外のいろいろな圧力があり、戦後日本人の余暇の考え方にはかなり大きな転換が生じました。

さて、ここで問題なのは、日本人の余暇と西洋人の余暇というものの間にはいろいろな意味で違いがあるということです。例えば日本人の場合、余暇の問題を、日常生活と余暇の生活というふうに分けて別個に分離して考える傾向があります。これに対して外国人の余暇の使い方の一つの狙いは、できるだけ日常生活と余暇を密着させようとする考えが非常に強く、またそれが当然であると考えています。さらにここでもう一つ考えておく必要があるのは、週休二日制等に見られる余暇の増大という問題が、欧米の結果からみて、どういふプラスがあり、どこに問題が残されているのか、検討する必要があるということです。

ところで、西洋人は、労働とは人間にとって好ましくないものと考えている。これは一八世紀半ばからのユートイリテリアン（功利主義）の思想を経て非常に深く根がおりた考え方です。つまり労働とは toil and trouble（労苦）で

あり、人間にとって好ましくない苦痛である。もし労働するならば、できるだけ時間の短い方がよいという考え方が生まれ、労働時間の短縮、週休増大の要求につながってくる。要するに人生とは余暇を上手にエンジョイすることに他ならないと彼らは考えるわけだ。しかし、こんな考え方で余暇の問題を処理していけるのかと言うことが私には非常に疑問に思えます。われわれ人間にとって余暇とは何であるかと言えば、余暇というもので人間が社会につながるのではなく、個人と社会とのつながりは、一人一人のその日のささやかな仕事、雇用労働ばかりでなく、自分の自営業の労働、あるいは家庭の中の労働などに媒介されて広い社会につながり、そのための余暇であると考えます。

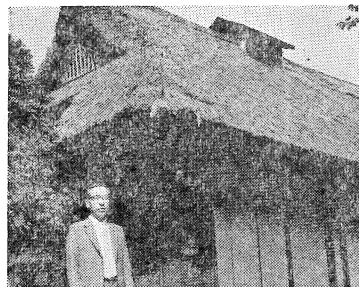
そしてそれによって始めて余暇というものが声を大きくして要求する必要もでき、またそれだけの根拠があるのだと私は考えます。以上の点を整理しますと、余暇は何のためにあるかを、われわれ自身が振り返ってみて、そして外国では余暇が今日どのような問題を引き起こしているかということと睨みあわせながら、週休二日の問題、さらに将来の週休三日の問題に対する、われわれの対処の仕方や気持の準備をしておくことが必要ではないかと思えます。

（記念講演の概要 文責・編集者）

開館七周年 記念事業として 旧民家の移築復元

寄付者 八王子市鐘水二一九七 小泉勇二氏
構造 茅葺入母屋造り
面積 建坪一三〇平方メートル
移築工事費 一、二〇〇万円
（募金による）

多摩地方独特の民家でおよそ一〇〇年前のものである。多摩ニ



かぶと屋根の旧民家を見る宮嶋理事

ユータウン区域内に入ったため移転しなければならぬので、地元であるセミナー・ハウスに永く保存してほしいという希望もあり、かつこの種の由緒ある日本家屋が構内にあることをかねてから念願していたことでもあったので、七周年というこの機会に記念として日本家屋による和風談話室兼セミナー室を建設することとなった。移築工事費の半額を日本自転車振興会に補助申請しているが、その可能性は未だ確実でないが、一方において創立十周年記念として七〇〇万円募金運動を昭和四十七年四月まで実施しているのので、財界及び賛助者による個人寄付を仰ぎ、その中から移築工事費に充当することにしたい。

この旧民家がキャンパス内に移築されることになれば、日本人には心の休息所となり、外国人には日本文化の現物となるであろう。完成は昭和四十九年春である。

開館七周年記念論集

『日本人の再発見』（弘文堂刊）
歴史に見る日本民族性

和歌森太郎

日本社会の特性
政治文化の問題をめぐって
神島 二郎

国際社会の日本人
国際化の主体たる要件は何
か
金山 宣夫

日本の若者と性の伝統
野口 武徳

現代青年の意識と行動
松原 治郎

明治の終焉と日本人
漱石・鴎外の文学に表れた
殉死の位相
小堀桂一郎

「甘え」の発見
岡目七目
土居 健郎

シンポジウム・日本人の再発見
オーテス・ケリー

開館七周年記念 第51回 大学共同セミナー

主題 アジア社会の比較研究

——アジアの国々との協調のあり方を求めて——

期日 昭和47年11月17・18・19日

〈全体講義〉

上智大学教授 川田 侃氏

〈セクション指導〉

A 緑の革命と赤い革命

——フィリピンの農民と農村

東京大学助教授 高橋 彰氏

B インドの経済発展とその社会的背景

一橋大学教授 深沢 宏氏

C 中国社会の「現代化」とイデオロギーの役割

成蹊大学教授 宇野重昭氏

電気通信大助教授 藤井昇三氏

D 先発国と後発国の接触

——戦前史における日米の場合

上智大学教授 三輪公忠氏

E 中東の社会変動と人間類型

アジア経済研究所主任研究員 林 武氏

〈参加学生〉

一一九名(うち女子五六名)

津田塾大(二二)、慶大(二三)、

上智大(二二)、早大(一〇)、東大

大(一〇)、東外大(五)、一橋大

(四)、中大(四)、武蔵大(四)、明

学大(四)、東大(三)、ICU(三)、

立大(三)、お茶の水女大(二)、明

大(二)、東京家政大(二)、共立女

大(二)

大(二)、神奈川大(二)、東工大、

横浜国大、山梨大、福島大、武工

大、工学院大、日大、東洋大、順

天堂大、成蹊大、白百合女大、

麗沢大、聖心女子大各一名(三一

大学)

問題になった情報の量と質

ベトナム、中国など第二次世界

大戦後のアジアは、常に激動する

世界の「核」であったし、今後も

アジアを度外視して現代を論ずる

ことはできない。そのアジアの一

隅にある日本は、著しい経済進出

を行ない、各国からは「日本軍国

主義」の台頭、「大東亜共栄圏」の

再現、といった非難の声さえ上が

っている。こうした状況を学生は

どうとらえているのか。全国の大

学生約一二〇人がこのほど東京八

王子の大学セミナー・ハウスで二

泊三日の「アジア社会の比較研究」

を行ない、アジアの国々との協調

のあり方を模索した。しかし、ア

ジア研究のもつさまざまな壁は厚

く、アジア社会研究のむずかしさ

を再確認し、あらためてスタート

につき直したことが、学生にとっ

て収穫になったようだ。

セミナーはフィリピン、イン

ド、中国、中東、日米の五つのセ

クション演習と、全員のシンポジ

ウムで行なわれた。どのセクショ

ンでも問題になったのが、情報の

量と質。

アジアに限ったことではない

が、外国の研究をする場合、日本

に入る情報はきわめて部分的、断

片的なものが多い。しかも、情報

伝達機関の性格、伝達者の理解の

程度や視点などが、その情報の質

そのものを規定する、といった避

けられない問題点が、とくにアジ

ア研究に関してはクローズアップ

された。

日本人の価値観でみる是非

教育面からの情報は、アジアに

関しては一九一〇年、日韓併合を

期して東洋史の講座が開講され、

当然のことながら、日本に都合の

いいゆがんだ中国観を教え「大東

亜共栄圏」の基礎固めの役割を果

たしたことを、指導の宇野重昭成

蹊大教授が説明した。研究の面か

らは、方法論をはじめ、アプロー

チが西欧流を主流としたため多く

の混乱が生じ、ひどいときは理論

不信に発展するなど、不幸なアジ

ア研究のスタートをした、とアジ

ア経済研究所の林武主任研究員は

指摘した。

現在、旅行者も多く、ルポの類

が豊富に出版しているが、これに

ついては、高橋彰東大助教授が

「フィリピンの農民は働かない、

という。これは事実だが、その背

景は、働けば収奪されるばかりで

報われず、働かなくても何とか食

っている農村社会の仕組みがあ

る。そこまで言及して、はじめて

ルポになる」と、注意した。

この体験と認識の關係は、イン

ドのセクションでとくに問題にな

り、現地へ行った経験の有無が、

よかれあしけれ発言の差になった

ようだ。

つぎに討論されたのが、視点の

問題。比較研究の意義は、あくま

で日本人の目と、日本人の価値観

でその対象国を見つめ、日本との

比較をすることから研究を始めよ

う、というオーストックスな意見

に対し「原則はその通りだが、日

本人としての意識が強すぎたため

の過去の失敗を考へることも必要

で、一度、その国の人の立場に立

慎重な態度をとりたいという発言

もあった。

日本への具体的な問題提起

開発途上国の多いアジアは、理

論主導型の国づくりが進められて

いるケースが多く、学生はややも

すれば理論面に走りやすいが、研

究する場合は理論と現実の差をい

かに見すえるかが、大切であるこ

とも指導教官から指摘された。

このほか、普遍性と個別性、社

会科学の役割、近代化と人間の幸

福、社会変革における諸問題、政

治の理念と現実、正義と信義、民

族主義、人種差別など、具体的な

国々の研究を通じて論議され、参

加者は「アジアは一つではない」

ことをあらためて確認しあった。

最後に川田侃上智大教授が「研

究は民族主義の担い手はどこから

出てくるかといったように、具体

的、実際の、個別的な深みを持つ

ていて、やればやるほどむずかし

い。そのうえ、個人からみた国家、

消費者からみた経済など、新しい

観点が要求され、さらに「逆逆の

理論」が世界的風潮で、価値観の

喪失、混乱がみられ、それが危機

感をあおり、ニヒルな状態をかも

し出す。ニヒルの極限はファンズ

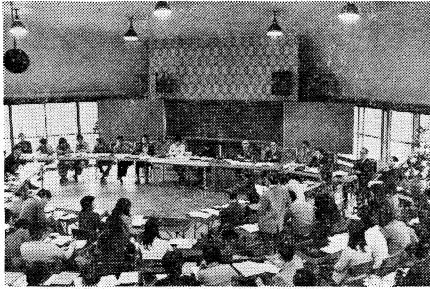
ムを生む」と警告。「アジアの問

題は、日本への具体的な問題提起

をしていくべき」と、このセミ

ナーをしめくくった。

(昭和47年11月25日付 毎日新聞夕刊より転載)



熱のこもったシンポジウム

第50回 大学共同セミナー

主題 日本文学の新しい研究方法

——平家物語を中心として——

期日 昭和47年10月13・14・15日

(全体講義)

「文学研究方法の動向と展開」

東京教育大学教授

小西甚一氏

「耳の文学と目の文学」

お茶の水女子大学教授

外山滋比古氏

「原型批評をめぐって」

ノースロップ・フライを中心に

東京工業大学助教授

出淵 博氏

「平家物語を中心として」

名古屋大学助教授

山下宏明氏

「平家物語の享受」

日本女子大学助教授

麻原美子氏

「平家物語における素材と素材ばなれ」

大妻女子大学助教授

信太 周氏

「平家物語における特殊問題」

東京教育大学博士課程

大井善寿氏

(参加学生)

三四名(うち女子二名)

早大(六)、聖心女大(四)、都留

文科大(三)、中大(三三)、一橋大

(二)、山梨大(二)、白百合大(二)

東工大、埼玉大、信州大、東教

大、東洋大、慶大、上智大、東女

大、日女大、明治薬科大、武蔵

大、駒沢大各一名(一九大学)

平家物語を

平家物語を

具体的な例に

日本文学の研究対象は、あくまでも生きた「文芸作品」そのものではなくてはならない。「作品」に密着した研究方法は、一九三〇年代後半から英米において急速に発達した。また本文批判においても、シェイクスピア研究を中心として英米に新文献学がおこったけれど、これも日本文学の世界ではあまり知られていない。さらに、フランスでは、近頃は英米といくらかちがった新批評が盛んであり、アメリカでは祖型研究を推進するため、人類学と結びついた研究方向も展開している。

これらの新しい研究方法を採り入れることは、八〇年来の惰性的な作業を革新するうえに非常に重要なだと思われるので、今回はこの問題を主題として取り上げた。

テニス大会に興じながら

日本自転車振興会補助の

全天候型コート

今回は、箏曲鑑賞などの珍しいプログラムとともに、テニス大会で汗を流すなど楽しく勉強が進められた。テニス大会はセミナー中日の午後、宮嶋竜興東京教育大学長の始球式の後、共同セミナーの先生、学生と当ハウス職員の八チームが、暗緑色とレンガ色のコート面に目も鮮やかな白線をぬって技を競いあった。

この美しいコートは、さる昭和四三年六月、日本自転車振興会の協力によって完成し、以来、利用者に愛用されてきたが、本年六月、再び同振興会の補助により四季を通じて使用できるように改修されたものである。この日のゲームは、面目を一新したコートでの初ゲームでもあった。

テニス大会に興じながら

日本自転車振興会補助の

全天候型コート

今回は、箏曲鑑賞などの珍しいプログラムとともに、テニス大会で汗を流すなど楽しく勉強が進められた。テニス大会はセミナー中日の午後、宮嶋竜興東京教育大学長の始球式の後、共同セミナーの先生、学生と当ハウス職員の八チームが、暗緑色とレンガ色のコート面に目も鮮やかな白線をぬって技を競いあった。

この美しいコートは、さる昭和四三年六月、日本自転車振興会の協力によって完成し、以来、利用者に愛用されてきたが、本年六月、再び同振興会の補助により四季を通じて使用できるように改修されたものである。この日のゲームは、面目を一新したコートでの初ゲームでもあった。

テニス大会に興じながら

日本自転車振興会補助の

全天候型コート

今回は、箏曲鑑賞などの珍しいプログラムとともに、テニス大会で汗を流すなど楽しく勉強が進められた。テニス大会はセミナー中日の午後、宮嶋竜興東京教育大学長の始球式の後、共同セミナーの先生、学生と当ハウス職員の八チームが、暗緑色とレンガ色のコート面に目も鮮やかな白線をぬって技を競いあった。

この美しいコートは、さる昭和四三年六月、日本自転車振興会の協力によって完成し、以来、利用者に愛用されてきたが、本年六月、再び同振興会の補助により四季を通じて使用できるように改修されたものである。この日のゲームは、面目を一新したコートでの初ゲームでもあった。

テニス大会に興じながら

日本自転車振興会補助の

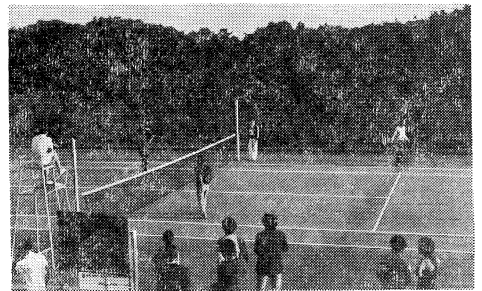
全天候型コート

今回は、箏曲鑑賞などの珍しいプログラムとともに、テニス大会で汗を流すなど楽しく勉強が進められた。テニス大会はセミナー中日の午後、宮嶋竜興東京教育大学長の始球式の後、共同セミナーの先生、学生と当ハウス職員の八チームが、暗緑色とレンガ色のコート面に目も鮮やかな白線をぬって技を競いあった。

この美しいコートは、さる昭和四三年六月、日本自転車振興会の協力によって完成し、以来、利用者に愛用されてきたが、本年六月、再び同振興会の補助により四季を通じて使用できるように改修されたものである。この日のゲームは、面目を一新したコートでの初ゲームでもあった。

テニス大会に興じながら

日本自転車振興会補助の



新装なったテニスコートでのテニス大会

大学教員懇談会

運営協議会

昭和47年9月23・24日

◆主題

「改正された大学設置基準の單位制度をどう活用するか」

◆プログラム

○協議

新しい單位制度と

大学セミナー・ハウス

(話題提供)

飯田宗一郎

大崎 仁

金子 忠史

○懇談・討議

出席者 二六名

東工大(四)、農工大(四)、中央大(三)、武蔵大(二)、立教大(二)、東京医科歯科大、電通大、名古屋大、桜美林大、慶応大、ICU、聖心女子大、法政大、武蔵工大、明学大、文部省 国立教育研究所各一名。

さる七月に行なわれた第六回大学教員懇談会「大学設置基準と大学交流」では、大学設置基準の一部改正により大学間の単位互換にどのような可能性が開けるかを討議したことは、既報のとおり(ニュー

スNO・28)である。このような討議を基礎に第一回来の懇談会の世話人を中心に、第六回懇談会の出席者を含め今回の協議会は、大学セミナー・ハウスが、この制度改正にどのような位置と役割を占めることができるかを検討したものである。

したがって、討議はまず、当ハウスの側から飯田専務理事が、すでに七年間の実績をもつ大学共同セミナーなど大学間交流のため開かれた大学を構想してきた経過を述べ、ここで行なわれるセミナーについて単位認定の方向で具体策をさぐってみたいと提案した。

これをうけて、それぞれに大学の立場から、率直かつ慎重な意見交換が行なわれたが、同時に文部省の大崎仁大学課長が、大学設置基準の改正の理由、目的さらに将来への展望に言及しながら法制上の問題までくわしく、文教行政の側から話題を提供し、最後に大学セミナー・ハウスからの問題提起も実質的には大学連合的な教育活動とみなすことによって現実性を帯びるであろうと示唆的な発言を加えられた。また、国立教育研究法の金子忠史氏からは、アメリカ高等教育機関の資格認定制度が例示されたり、名古屋大学の川崎助教授がオープン・クレジットシステムといった考え方が、一般的に前提されることが重要であろうと述べるなど、問題の核心に触れる討論が積み重ねられた。

千人会

七周年記念
千人会增加運動

千人の会にはなお四〇〇人を、昭和四十七年一〇月現在六〇〇余名ですが、よくぞこんなにたくさんの方が賛助くださったものと感謝しています。昭和四十二年七月から開始したこの千人会ですから、この機会に名実共に一〇〇〇人の会にしたいという願いと、その位の賛助者は必ずありますよという世論を背景にして、この七年の間に利用された方々を対象としてお願いいたします。

- ◆新しく会員となられた方々
(昭和47年12月末現在)
現在会員 大学生 四八五人
六二三人(社会人 一三八人
第18回報告(申込順)
C 東京都立商科短期大学教授 島袋嘉昌殿
C 工学院大学助教 今井義夫殿
A 自由業 柴田菊代殿
C 日本女子大学図書館友の会 常務理事 北野美枝子殿
C 東京大学農学部農工研究室 岩崎代志治殿
C 財団法人早稲田奉仕園 総主事 布施壽雄殿
C 日興投信外国運用部 萩原清子殿

- C 三菱商事K K軽金属部 近藤雅世殿
C 日本放送作家組合 森川和久殿
C 東京学芸大学教授 角尾 稔殿
C 第一学習社通信教育部 小沢貴子殿
C 静岡雙葉学園教諭 水野悦子殿
B 東京都立大学教授 千葉正士殿
A 武蔵大学学長 正田建次郎殿
B 東京大学助教 池田 温殿
B 一橋大学教授 細谷千博殿

- ◆会費ありがとうございます
昭和47年8月11月(敬称略)
北野弘久、武藤富男、藤本紘、松原秀一、最上武雄、新見宏、大村晴雄、今井義夫、谷清、北野美枝子、田中庄蔵、三和治、中島文夫、上代たの、平出彦仁、内山尚三、鈴木成文、黒田道雄、松村信治郎、小林正、小田切松義、藤井隆、小林忠義、中川重雄、増田茂樹、福山仙樹、高村象平、中村英勝、田中弥寿雄、山本武彦、関田寛雄、山本芳夫、総山孝雄、小林正一、森川芳彦、藤田淑子、佐藤豪、鈴木修次、岡本剛、加藤栄一、遠山啓、中村正久、穂山貞登、鞍馬菊枝、関本昌秀、内ヶ崎賢五郎、釜池善一、西村善四郎、鈴木忠義、武沢信一、松尾登、田端光美、出居茂、久武雅夫、永井克孝、後藤米夫、朝倉孝吉、植林博太郎、宮川透、原豊、谷俊治、筑波常治、神山妙子、坂本義和、松田武彦、小堀巖、泰本融、藤井幸彦、古沢頼雄、宇川和子、長松昭男、井深淑子、加藤一郎、下田弘、村上陽一郎、押田勇雄、武藤英輔、藤永光之、朽津耕三、斉藤信房、小堀桂一郎、稲垣寛、泉治典、末松安晴、堀江忠男、東寿太郎、安味貞正、島袋嘉昌、佐原六郎、増田四郎、野田良之、高橋三郎、杉沢新一、長坂舜二、中島斌雄、重田信一、沖中重雄、友部直、内田章五、伊藤修、飯島宗享、石川吉石衛門、松延博、今井淳、白井常、伏見弘、天利長三、川原栄峰、藤永保、戸塚元吉、小林善彦、多賀義高、宇野重昭、田村獻、森田信義、坂垣与一、小河原正巳、北沢佐雄、宮崎繁樹、鶴岡義一、小川芳男、磯部浩一、堀信一、弓削三男、戸田盛和、大須賀政夫、田村皖司、井門富二夫、武者小路公秀、玉虫文一、蒔盛晴、小田中敏男、赤堀四郎、深沢宏、岩浅武雄、井上達雄、細田友雄、増田義男、松元文子、森繁雄、松本樺太、阪田正三、水野伝一、岡本定次、山本大二郎、宇野義方、岡島真理、手塚富雄、笹島恒輔、前田陽一、中尾由矩子、金田品二、吉沢英子、祖父江孝男、坂口順治、木村久男、高橋正男、三輪光雄、飯田恵、バックス・ジャン、高野雄一、大須賀節雄、吉武泰水、柴田菊代、角尾稔、飯田能子、飯田八千代、岩崎代志治。

寄付金報告

昭和47年7月~11月
ご支援を感謝して、拝受いたしました。

- (一般寄付者芳名)
三〇〇〇円 国立教会 殿
三〇〇〇円 渡辺佐平 殿
三〇〇〇円 教師館利用者一同 殿
二〇〇〇円 石井栄治 殿
五〇〇〇円 多摩セラロジ 殿
三〇〇〇円 一開発委員会 殿
三〇〇〇円 立正大学 杉沢ゼミ 殿
三〇〇〇円 新生活運動協会 殿
五〇〇〇円 武蔵野電気通信研究所 殿
三、三三〇円 明治大学 祖父江ゼミ 殿
三、〇〇〇円 日本大学 瀬佐良男 殿
五、〇〇〇円
- (特別寄付者芳名)
〔植樹基金〕
五、〇〇〇円
お茶の水女子大学 家政学部児童科 殿
五、〇〇〇円
山梨英和短期大学 英文学科第六期生 殿
五、〇〇〇円 東京家政大学 児童教育専攻第一期生 殿
五、一九〇円
第49回大学共同セミナー 殿
一五、〇〇〇円
全国高校家庭クラブ連盟 殿
五、〇〇〇円 小川芳男 殿
三、一八二円
第50回大学共同セミナー 殿
一〇、九一四円 文部省高専主 事研修会参加者一同 殿
- (現物寄付)
杉の木三本 大学英语教育学会 (J A C E T) 殿

宿泊料金改定のお知らせ
(昭和四十八年四月一日実施)

食料金
朝食 二〇〇円 (一五〇円)
昼食 四〇〇円 (二五〇円)
夕食 四〇〇円 (三〇〇円)
合計 九〇〇円 (七〇〇円)

宿舎一泊料金
ユニットハウス
*会員校 七〇〇円 (六五〇円)
*学生会 九〇〇円 (八五〇円)
*非会員校 八〇〇円 (七〇〇円)

食事料金
*長期研修 七五〇円 (七二〇円)
*学生会 九五〇円 (九〇〇円)
*会員校 八五〇円 (八〇〇円)
*非会員校 九〇〇円 (九五〇円)
*学生会 八五〇円 (八〇〇円)
*非会員校 九〇〇円 (九五〇円)

施設利用料金(セミナー室等)
*会員校は無料
*非会員校は七割引き
*学生会は現行通り据置き
*非会員校は現行通り据置き
()内は改定前の料金

利用状況

◇八月

- 東京理科大学 竹田 政民
- 関東ジュニアディベイト連盟
- 日本キリスト教団松原教会
- 東京立大学 稲垣 寛
- 東京工業大学 末松 安晴
- 日軽アルミ株式会社 伊丹 邦夫
- 東京理科大学 石原 研而
- 東京大学 田村 皖司
- 杉野女子大学 佐藤 進
- 日本女子大学 安原 実
- 国際基督教大学 熊谷 孝
- 文学教育研究者集団 梅沢 正
- カトリック国際援助会 今井 秀雄
- 国立特殊教育総合研
- 国際経済教育学学生協会
- 京王帝都電鉄(株) 藤永 光之
- 市工工業(株) 吉谷 龍一
- 日立製作所(株) 西川 五郎
- 東京教育大学 桐谷 維
- 東京都立大学 堀川 純枝
- 東京女子短期大学 堀川 浩南
- 東京都立大学 橋口 英俊
- 東京経済大学 グリーン英会話学院 鈴木 一雄
- 明治学院大学 高野 史郎
- 東洋大学 飯島 宗享
- 東洋大学 早川 和宏
- 日印文化協会 一番ヶ瀬康子
- 日本女子大学 大沢 綱一郎
- 東京理科大学 福井 芳男
- 語学教育振興会 桑沢スタイルオブジネス 川本 勝
- 東京スクール研究所 小田 中敏男
- 日野自動車工業(株) 日野協力会 大場 興一
- 順天堂大学 鈴木 達男
- 昭島保育研究会 渡辺 佐平
- 法政大学 星野 郁美
- 武蔵大学

- 東芝商事(株) 五辻 通隆
- AFS国際奨学財団 小瀬 幸昭
- 炭素材料夏期セミナー 松井 享夫
- 東芝IC技術部 古野 陽一
- 上智大学 中村 龍一郎
- AFS国際奨学財団 中村 孝信
- 法政大学 佐々木恒夫
- 放送研究会実行委員会 永野 賢
- 千葉商科大学 安井 郁
- 東京学芸大学 竹内 昭夫
- 法政大学 寺田 和夫
- 東京大学 高橋 輝男
- 早大生産研究所 高橋 輝男
- 東京工業大学 辻 宗茂
- 東京大学 見田 茂
- 東京慈恵会医科大学 上智大学 平井 久
- 日本第二学園 平山 輝男
- 東京都立大学 鶴見 和子
- 早大生産研究所 長尾 龍一
- 早大生産研究所 中根甚一郎
- 独協大学 清水 敏充
- 明治学院大学 原田 勝弘
- 専修大学 小沢 康人
- コルゲート大学 小出 詞子
- 東京都立大学 速水佑次郎
- 東京都立大学 倉山 好
- 東京都立大学 杉沢 進
- 中央大学 川口 弘
- 慶応義塾大学 和木 松太郎
- 法政大学 山本 博
- 東京慈恵会医科大学 熊谷 公明
- 成蹊大学 熊島 重成
- 津田塾大学 小野 卓爾
- 東京経済大学 大谷 喜明
- 上智大学 鈴木 幸寿
- 日本民間放送労働組合連合会 木村 治子
- 順天堂大学 江尻美穂子
- 津田塾大学 豊田 浩七
- 横浜国立大学 三橋 文七
- 中央大学 宮崎 寿一
- 慶応義塾大学 西野 寿一
- 東京経済大学 吉村 寿
- エコー共同仕入(株) 鈴木 椿男
- 学習院大学 遠藤 浩
- 日本女子大学 越智 昇
- 横浜国立大学 三橋 文七
- 中央大学 千住 鎮雄
- 慶応義塾大学 若林 貞雄
- 都立お茶の水専修職業訓練校 大橋 浩一
- 東京立石電機(株) 正田 徳明
- ソニー(株) 木下 徳明
- 中央大学 依光 正哲
- 一橋大学 依光 正哲
- 青山学院大学 依田 明三
- 横濱国立大学 依田 明三
- 青山学院大学 依田 明三
- 横濱市立大学 越智 昇
- 一橋大学 岡田 誠司
- 東京理科大学 神山 妙隆
- 青山学院大学 神山 妙隆
- 東洋大学 神里 公彦
- 青山学院大学 都留 春夫
- 京浜地区協力会 境 二郎
- 横濱青梅青年会合同修会 深沢 淳志
- 早稲田大学 石川 淳志
- 法政大学 淡路 剛久
- 花王石鹼(株) 山手 茂
- 立教大学 加藤 勝郎
- 東京女子大学 宮下 俊彦
- 青い鳥愛児園 松尾 浩也
- 東京大学 松尾 浩也
- 紀伊国屋書店(株) 渡部 浩一
- 早稲田大学 大橋 浩一
- 津田塾大学 吉田 辰男
- ソニー(株) 佐古純一郎
- 東芝府中工場 森沢 頼雄
- 早稲田大学 稲田 祐二
- 日本女子大学 山本 登
- 東京工業大学 小酒井 望
- 慶応義塾大学 山科 高康
- 順天堂大学 河村 安洋
- 中央大学 河村 安洋
- 武蔵野美術大学 山科 高康
- 東京大学

専務理事ノート

年の始めのためしとして
新春をことほぎ申上げます

ここ多摩の丘で大学セミナー・ハウスは第八年目の新春を迎えました。私は例年の如く真理の鐘を撞き、冷たく澄んだ空気の中で、ただ一人年頭の祈りを捧げました。私はこうした清々しい心をもつてセミナーの丘から皆さまに新年のご挨拶を申し上げることができ、まず幸せを感謝しております。

「信万事基」とは聖徳太子のお言葉と承知していますが、信は万事のもとと心得て、私はセミナー・ハウスを今日まで守って参りました。セミナー・ハウス創立十周年の歴史は社会と大学と国とがそれぞれ立場でセミナー・ハウスの活動に参加しかつ協力し、「信」を行動で裏付けしていただいた貴重な事実であると申ししても過言ではないと存じます。

の態度に義憤を感じました。今年こそ「肥満児日本」「日本株式会社」は道義的もしくは社会的責任を会得してほしいものです。

昨年一月の式典にご出席くださいました方々が開館当時のことを回顧され、木が大きくなりました。八王子市をはじめとして、個人、大学、団体、学会、共同セミナー研修会等々が植えてくださった記念樹は数百年に達します。武蔵工大岡本定次先生の年賀状に次の句がありました。私の感想もまったくこの句の通りです。

さて新年早々恐縮ですが、今回は千人会員の募集をさせていただきました。何人かの先生から、この機会に積極的に勧誘しなさいよ、とおっしゃっていただきました。金を出すことはセミナー・ハウスの縁が切れないようにするためです、よ、といってお申込みくださった方があります。

人間性豊かな連帯意識に支えられてセミナー・ハウスは維持運営されることを本旨とします。個人参加とパブリック性の均衡です。ある著名な文化施設では、二千数百名の会員があるとのこと。三九大学の会員校の中からさらに四〇〇人を探し出せば、名実共に千人会が実現します。それが開館七周年記念のPLAQUEになるように切に願っています。